西照

西照寺々報〝さいしょう〟
第 7 号
1987年11月1日
発行　浄土真宗本願寺派・西照寺
高岡市吉久2丁目4－40

私の念仏

村井重政

早くもお米の取り入れの秋となりました。ふと子供の頃を思い出し、親から聞かされた事です。此れで一年死なないよ。新米が収穫され私達の糧となるからです。私達が働き、日照りや雨水の恵みに依りお米が獲られた事を如何にも当然の事であり、自分の努力で作られたと思われがちではないでしょうか。此の考え方は大変な勘違いをしているのです。お陰様でと感謝する心を忘れていることでしょう。

すこし私事を紙面をおかりして汚させて頂きます。私が二十六才で一家の支柱と頼む父親に別れ、三年忌法要には母親と別れました。私は法要が供養であり、報恩の心がこの私を救って下さると思い生活をしてまいりました。生活が不安で心が動揺し苦しい思いで、私だけが何故他の人達より不幸な身に逢い苦悩が多いのかと迷いました。理由は、小さな子供と小学生が二人に中学生が一人を残して他界されたので頼む人が無く生活の心配が先立ち私自身が冷静さを失い、事があるたびに感情が前面に出て、人の言い分を素直に聞くことが出来ませんでした。物事の判断が対抗意識となり、他人の心を傷つけていたと今になり私が情けなく思う年になりました。

此のような私に法を聞く機会を与えて下された他人の奨めが、浄土真宗の連続研修会でありました。私はこれも因縁の計らいと思います。私の家に年忌法要行事が多くありましたので、読経や法話を聞かされまして、如来のみ法を私なりに解釈をしたり、修行が出来ない私でありながら理由追及をする事まありました。私自身働き生活する中に、此の連続研修会を通して苦悩を苦悩ではなく、せめて心の励みになれば良いと思っています。

私が青年の頃でした。戦没者追悼法要を厳修させて頂き、住職の計らいにより、勝興寺の御連枝さんをお迎えして施行致しました。今私は此の機会が仏縁であったと喜びと感謝しなければなりません。同朋のお誘いのお陰で法座に参加させて頂き中央教修を修了させて頂き感謝の気持ちで一杯です。

今私は念仏を私にとって、どのように生活と組み合わせ、如来（親）の称名を称えさせて頂き、慈悲を信じてこの私の身をおまかせして生きて行き度いです。信心とは他人の意見で変わるものでない、人々に巡り合い、聞く耳と受け入れる心の目を開く事が仏の道でありませう。浄土真宗は弥陀一仏であります。雑念に迷わず。如来の摂取不捨の願がみちみちて廻向されて、生かされている私でありましょう。無明の闇に生きる衆生凡夫に対して法に問い、み教えを聴聞し称名念仏を称え生きる事だと思ひ、智慧の念仏を得る法蔵と他力本願力を信じることが、私を生かさせて頂けるのでしょう。此の念仏を子供から孫へと伝道して、信心を唯一道として精進致し度いものです。私達は感情的に判断する性格と自分の物差しで決めつけますが、自分の物差しが出逢う人々に知らず知らず心に傷をつけている私達ではなかろうか。せめて仏教を聞法して、親鸞聖人が雑行をすて「唯念仏して」とお味わいになられた。他力廻向の身であると定めて、中途半端な解釈や理由を考えることなく、経を読経して、同朋を求め念仏を喜び、生かされている私がいつかは別離の機がくるまで浄土への道標に歩む身と心得ることが念仏者でしょう。拝む人は拝まれる。又当然のことを有り難いと思ふ感謝する心を持ちたいと思います。朝の目覚めが、今日も一日この私が弥陀の計らいに依り生かされている証でありましょう。生かされている尊い生命を大切に守ることが生きる権利であり、甘えてはならないと思います。唯一筋にみ仏の摂取不捨の願力が私に廻向して下さるのだと安楽に念仏を称え、人生を送りたいものです。（4ページにつづく）

ひかり来たりて ―仏陀の出現―

(7) 世の人々の安楽のために

岡西法英

六年間にわたる苦闘の末、迷いと苦しみの暗闇の中から光を見出した釈尊は、そのやすらぎとよろこびを他の人々に分かち与えようと、終わることのない伝道の旅へと立ち上がってゆかれました。

『比丘たちよ、遊行せよ。多くの人たちの利益のために、多くの人たちの安楽のために、世の人々への哀愍のために、人・天の義理、利益、安楽のために。二人して一つの道を行くなかれ』（ヴィナヤ）

後の弟子たちに語られたこの言葉こそ、釈尊の生涯をかけての伝道の旅の出発点とは何であったか、そして終極目標が何であったかをはっきり示しています。

〃さとり〃の発見はそのまま〃迷える者達〃の発見であり、〃安楽〃への到達はやがて〃苦悩せる者〃への限りない慈愛の湧きあがりであったのでした。

〃さとれる者〃のさとりが、単に〃さとれる者〃の〃さとり〃であれば、人の世に如来はなく、仏陀は現れなかったわけです。そして私達は、「迷いの凡夫」でもなく、「苦悩の有情」でもなかったわけです。

釈尊がその〃さとり〃から立ち上がって、自らお悟りになった〃法〃を、他の人々に、それも〃あらゆる人々〃に説き示して「これを見よ、これを考えよ、この道を歩めよ、ここに至れよ」と呼びかけて下さったればこそ、人の世は、仏陀を如来を知ったのです。

「如来」「仏陀」という名称は、一面から言えば確かに釈尊自らの名のりであるとも言えますが、しかしそれが呼び名である限りは、呼ばれるためにある名であり、呼ぶ者が生まれてこそ「如来」は、「仏陀」は誕生せられるとも言えるわけです。

もっと身近につき詰めれば、私にとって「如来」「仏陀」がましますということは、私がその名を聞き、その教えを学び、迷い苦しむ自己の上にかけられた願いと呼びかけに出遇ったということに外ならないのです。言葉をかえていえば、如来の光によってはじめて如来の存在を知ることができるのです。

「如来」とは真実の具現者、「仏陀」とは「目覚めたる者」というのが一応の意味ですが、私達一人一人にとりましては、「如来」とは真実を見失っている私だからこそ真実を示して下さる方、「仏陀」とは、眠っている私だからこそ呼び覚まして下さる方であると言えましょう。

釈尊の伝道の旅への出発は、〃目覚めたる者〃の〃目覚めさせる者〃への出発であったし、〃安楽に到達した者〃の〃安楽に至らせる者〃への出発であったと言うこともできましょう。

まさしくここに、人の世に光があらわれたのです。人の心の暗闇が照らし出されたのです。釈迦如来が人の世に登場されたのです。

「人々の安楽のために」という言葉が示すように、釈尊の説法、すなわち仏陀の特色は、徹頭徹尾、苦悩を除き、安楽を得させることを目的としているという点にあります。

浄土三部経をひもといて見ますと、『無量寿経』には「恵むに真実の利を以ってせんと欲す」、『観無量寿経』には「仏まさに汝のために苦悩を除く法を分別解説せんとす」、『阿弥陀経』には「一切世間のためにこの難信のほうを説く」とあります。まとめて言えば、真実に遇うところに一切の苦悩をのり越える道があり、その教えは、うわべの姿や形にばかりとらわれている常識的な考え方では受け入れが難

いものであるということでしょうか。

ひるがえって私達の日常を考えてみますと、余りに多くの論説や情報があふれていますが、一個の人間として生き、そして死んでゆく人間なるが故の悩みの根源的な解決、「安楽のため」の語りや言葉、そして行動の何と少ないことか、私自信が何とどうでもよいことにばかりに浮き身をやつしていることかと思わずにはいられません。

釈尊は、善悪を説かれたのでもなく哲学を説かれたのでもなく、ただ一筋に苦悩をこえて安楽に至る道を説かれたのだという、この事は何よりもしっかりと胸に刻んでおかなければならないと思います。多くの経典の最後が聴衆の「歓喜」でむすばれていることが、それを裏書きしています。

釈尊が最初に法を説かれた相手は、故郷のカピラ国を出たとき一緒に出家した五人の旧友であったと伝えられています。「五比丘」と呼ばれる彼らは、ベナレスに近いサールナート（鹿野苑）で釈尊と再会しました。修行の途中で苦行をやめてしまった釈尊を当初は軽べつしていたのですが、やがてその教えを聞いて弟子となりました。

ここにはじめて教団が成立したわけです。仏と法（教え）と僧（和合の教団）の三つを三宝（三つの宝）といいます。

仏法僧の三宝こそは、迷いと苦悩の人間すべてにとっての帰依処（よりどころ）となるものです。仏法僧の三つに帰依することを三帰依といいます。三帰依によって人は仏弟子となるわけです。今日、本山で行われる帰敬式（おかみそり）は三帰依によって仏弟子となる儀式なのです。存命中に帰敬式を受ける機会のなかった人は死後葬式の直前に、住職から帰敬式を受けるという形になっています。

私達は僧（サンガ＝教団）を通して法（ダルマ＝教え）を聞き、法を通して仏（ブッダ＝覚者）のお心に遇うことができるのですが、それはまた、仏の心（智慧と慈悲）が言葉として現われたのが法であり、その法を受けた人々の具体的な姿が僧（教団）であるということでもあります。

法を聞かないでは仏に帰依したということにはなりませんし、仏の智慧と慈悲にふれないでは法を聞いたことになりません。僧の活動なしには法を聞くことはできませんし、法にしたがい法を伝えることがなければ僧とはいえません。

法を聞かずに仏をあがめるのは、帰依しているのではなく〝まつっている〟のです。仏の心にふれないで法を聞き学ぶのは、帰依ではなくて学問か哲学です。僧（教団）を敬い教団の一人として参加することがなければ単なる教養であって帰依ではありません。

仏法をよりどころとして生きる仏弟子となるためには、よりどころとすべき仏の心と、よりどころとすべき仏の教えと、よりどころとすべきよき仲間の集いがなければなりません。

仏法をよりどころとして生きる仲間の集い（僧）は比丘（男性の出家修行者）、比丘尼（女性の出家修行者）、優婆塞（男性の在家信者）、優婆夷（女性の在家信者）の〝四衆〟によって構成されます。釈尊は、男女を問わず、出家在家を問わず、あらゆる人々に安楽への道を説かれたからです。

五比丘を教化された後、釈尊は、ベナレスの豪商の子であったヤサという青年と、その家族、友人達を導かれました。そしてここに新たに五十五人の年若い比丘が教団に加わったわけです。

その後も釈尊は、かっての苦行の地ウルベーラへ向かわれる途中で、王族の青年三十名を、ウルベーラで、火を祀るバラモンであった三兄弟、ウルベーラ・カッサパ、ナデイ・カッサパ、ガヤー・カッサパと、彼らの弟子達千人を教化し、マガダ国の大王ビンビサーラを信者とし、さらには、サーリプッタ（舎利弗）、目連（モッガラーナ）と彼らの弟子二百五十人とを導いて弟子とされました。

彼ら多数の仏弟子達の出現によって、いよいよ仏法は歴史の表舞台に登場してくるのです。

そしてそれはそのまま、「世の人々の安楽」への釈尊の願いが世の人々の前に形をあらわしたことでもありました。（つづく）

「教行信証」の中に中国の曇鸞大師のお言葉に「同一に念仏して別の道なきが故に、遠く通ずるにそれ四海のうち皆兄弟となす」といわれています。同一に念仏とはお称名と教えられ、一つには同一に仏に念われているとの意味です。私達は仏に念われて、生かされている身だからこそ世の中の人皆兄弟と呼ばれたと思います。その兄弟をいやしめてかろんじ、差別するは自らをいやしめかろんじているのではなかろうか。私は此の機を逃さず、日々を空しく過ごすか、み法の豊かな人生を送り度いです。

私達は生命の危機を背負いながら生きているのです。念仏を申す中からご恩報謝の生活だと思っています。浄土を背後に往生を一筋にと心に定め念仏を称えさせて頂きます。私は現在門徒推進員の一人として聞法に励み、伝道に精進する事だと思います。単に知識を得る場ではなく、私の信心の心を育てて頂く場であります。法座を拡め聞法を輪転し伝道活動をしながら、お互いに往生人として歩んでまいりたいものです。「歎異鈔第二章」に、念仏は真実の浄土に生るゝ因にてやはんべらん又地獄に堕つべき業にてやはんべらん総じてもて存知せざるなり、たとへ法然上人に騙されまいらせて念仏して地獄に堕ちたりともさらに後悔すべからず候。親鸞におきては「たゞ念仏」を申すこと、弥陀にまかせ参らせ候。疑いを捨て自力を捨て、おうせに従い称えるので結果などはどうでもよいと申されているのです。

「心得たと思うは心得ぬなり、心得ぬと思うは心得た事なり」と。気まぐれに書きましたが、朋と歩まん浄土に。

南無阿弥陀仏　合掌

昭和六十二年九月十五日　本願寺派門徒推進員

浄土真宗よろず心得

喪服　日本には古来喪服という習慣があって、葬式にはじまる死者儀礼に出席する際には、通常この喪服を着ることがならわしになっています。

現在では葬儀に参加する人はだれでも喪服を着なければならないように思われていますが、本来は喪に服する人達だけが着るものであり、近親者か親友でもないかぎり喪服を着る必要はありません。最近では平服のうえに喪章をつけたり、腕章を着用したりしている人も増えつつありますが、地味な色彩の着物や洋服さえ着ていれば何も喪章など着ける必要はありません。

法事の場合、主催者は別にして招かれる者が出席する場合、喪服を着る必要はありません。それよりも念珠を忘れずに持参して掌を合わせることの方に、はるかに大切な意味があります。

忌明け　葬式後しつらえた中陰壇は、四十九日間の中陰がすんだら片付けます。これを「壇ばらい」「壇引き」などとも呼んでいます。また忌明けと呼ぶ地方もあります。忌明けとは死穢を忌む神道の観念に基づいて伝承された習俗で、忌のかかった人々が厳重なしきたりから解放されることです。忌明けが終われば完全に死穢から遠ざかるというのです。また忌晴れの意味でもあります。しかしね浄土真宗では、死を穢れと見てこれを忌むということはありません。別離の悲しみと、明日は我が身という不安を機縁として、生まれた以上は必ず死すべき互いの身であることに思いを致し、仏縁を深めることに重点があります。

（「浄土真宗葬儀よろず心得」より）

西照寺行事案内

十一月十五日昼席
（午後二時）
～十六日昼席まで
報恩講

十一月二十七日昼席
～二十八日昼席
大谷派（お東）
御正忌　報恩講

一月一日　午前五時
二日　午前六時
三日　午前六時
修正会（元旦会）

一月十四日　朝席
～十六日昼席
御正忌（報恩講）

お誘い合わせの上、ご参詣下さいませ。